

平成 30 年 8 月 31 日現在

機関番号：23803

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26285193

研究課題名(和文)ニューカマー二世世代の義務教育卒業後のライフコースと次世代形成に関わる総合的調査

研究課題名(英文)A Comprehensive Study on the Life Course of the New Comers 2nd Generation

研究代表者

角替 弘規 (TSUNOGAE, Hiroki)

静岡県立大学・食品栄養科学部・教授

研究者番号：10298292

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、ベトナム・カンボジア・フィリピン・中国・ブラジル・ペルーにルーツを持つニューカマー二世世代へのインタビュー調査から得られたデータに基づき、かれらの日本社会への適応のあり方を明らかにしたものである。その際かれらがいかなる資源を調達し、蓄積を図っているのかという点に留意した。

本研究においてはニューカマー二世世代の様々な側面(職業選択、ジェンダーと教育達成、進路選択と大学進学、帰国経験等)に着目し分析を行った。共通して指摘できるのは、二世世代が出身国や親世代またはエスニックコミュニティとの文化的葛藤を経て経験していることである。かれらの日本における社会的達成は決して簡単なものではない。

研究成果の概要(英文)： In this study we described and analyse the life course of the immigrant 2nd generation who had graduated Japanese compulsory education and been worked and lived in Japan. All the analysis in this study are based on the interviews of 170 immigrants 2nd generation from 6 countries(Vietnam, Cambodia, Phillipine, China, Brazil and Peru).

We analysed many aspects of immigrant 2nd generations, for instance about their selection of occupations, relationships between gender biases and educational achievement, their educational course selection and admission, the affection of experiences of going back to their countries and so on. Through these analysis we found that most of immigrant 2nd generation in Japan have experienced a lot of difficulties in making their social achievement. The difficulties come from the conflicts between their parents or relatives, or ethnic communities. And we found that there are some influences of parents' human capitals for 2nd generations' achievements.

研究分野：教育社会学

キーワード：多文化教育 ニューカマー 二世世代 青年期 ライフコース エスニシティ

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究着想の背景

ニューカマーと称される日本に長期滞在する外国人が増加した1980年代以降、ニューカマーに関する調査研究が数多く行われ、教育分野でも、「日本の教育と社会」のリーディングスにおいて、志水宏吉編『エスニシティと教育』(2009)が刊行されるまでに、研究が蓄積されてきている。特に、学校教育において「エスニシティ」がどのように扱われるのか、他方、そうした扱いのもとで、外国人の子どもたちはどのように学校教育を経験していくのか、また、それらが「エスニシティ」間で異なるのか等、これらの研究蓄積に、本研究グループの研究分担者も大きく貢献してきている(志水・清水 2001、額賀 2003、児島 2006、清水 2006)。

一方、日本社会における外国人の増加という現象が始まって以来、およそ30年が経過し、親の移動に伴って来日し、日本の学校教育のもとで育った外国人の子どもたちは青年期から壮年期を迎えつつある。と同時に、日本生まれの外国人の子どもたちも青年期を迎えつつある。すなわち、ニューカマーの第二世代が第三世代を育む時期を迎えているのである。しかしながら、このようなニューカマーの第二世代に焦点を絞った研究は多くはない。というのは、「ニューカマーの子ども」を対象とする調査研究の多くが、第二世代を調査研究の対象として選定してはいても、その対象選定に「第二世代」としての意味を十分に検討材料として組み込んでいないことに起因している。ただし、このことは必ずしも、これまでの調査研究の有り様を否定するものではない。なぜなら、「第二世代」として捉えることの意味は、その括りが「第一世代」／「第三世代」と比較することで明らかになるものであり、この観点において、「第二世代」に焦点をあてた調査研究は、今後本格化していくことが予想される分野なのである。したがって、本調査研究は、今後の第二世代の調査研究を先導していくこともねらいの一つとしている。

(2) 先行研究の検討

この文脈において、先行研究として捉えておくべきは、オールドカマーである在日朝鮮人を対象とした福岡安則(1993)や金泰泳(1999)の研究である。福岡は、在日朝鮮人の若者世代のアイデンティティに注目し、「同化」と「異化」を軸として、「共生志向」「祖国志向」「個人志向」「帰化志向」を理念的に導き出すと同時に、調査結果に基づき、理念枠組みから漏れる「葛藤」タイプまでを含みこむ第二世代のアイデンティティの多様性を明らかにしている。また、金は、第一世代と第二世代のアイデンティティの違いに注目し、一世が「民族」を基盤に「自由」を獲得していくのに対し、二世は、一世の獲得した「民族」に絡め取られることにより、

ある種の「不自由」を経験していくということも明らかにし、「エスニシティ」をめぐる世代間葛藤が明らかにされている。しかしながら、在日朝鮮人を対象とした世代間比較を試みる研究は、アイデンティティ研究に限定されており、獲得される資源や資本、あるいは、生成される家族の物語に注目しつつ世代間の差異を明らかにするものは見当たらない。

一方、海外では、こうした観点に注目しつつ、世代間の違いに注目した研究も多く蓄積がある。管見の限りで、本研究の調査研究のモデルとなりうるのは、まず、Zhou (1998)らによる、ベトナム人の子どもたちのアメリカでの成長過程を描き出した研究である。注目されるのは、ベトナム人の二世のライフコースを描き出すことにとどまらず、アメリカ社会におけるベトナム移民の社会経済的位置づけというマクロな観点からの分析を加えることで、エスニックコミュニティの存在が、かれらの成長の有効な社会資本として機能することを明らかにしている点である。また、そうしたことを明らかにするために、かれらの獲得する言語・家族関係、地域社会、学校など、かれらを取り巻く環境を幅広く調査対象としている点も、本研究のモデルとなりうる。加えて、Portes (2001)らの研究は、第二世代の社会的成功を、第一世代から相続される資源と第二世代を取り巻く環境の資源から分析枠組み(調和的文化変容・文化変容への調和的な抵抗・不調和的文化変容・選択的文化変容)を析出し、量的調査を実施することで、エスニシティ間を比較している点に特徴があり、本研究のモデルとなりうる。以上のような学術的背景に加えて、ニューカマーの来日は、2008年のリーマンショックを契機に減少傾向にあると同時に、滞日するニューカマーは派遣労働者ゆえ「貧困」に直面していることも容易に想像される。他方、依然として継続される政府の入国管理政策によって、外国人の入国はサイド・ドア利用によるところが大きい。これらの日本社会の影響を受けつつ、ニューカマーは第二世代から第三世代への移行しつつある。したがって、社会経済的影響を考慮しつつ、ニューカマー第二世代に焦点をあてる調査研究は、社会的にみても急務の課題であると考えた。

<引用文献>

- 志水宏吉編著 2009『リーディングス日本の教育と社会 17 エスニシティと教育』日本図書センター。
- 額賀美紗子 2003「多文化教育における「公正な教育方法」再考—日米教育実践のエスノグラフィ—」『教育社会学研究』第73集、日本教育社会学会、東洋館出版社。
- 志水宏吉・清水睦美 2001『ニューカマーと教育—学校文化とエスニシティの葛藤をめぐって—』明石書店。
- 児島明 2006『ニューカマーの子どもと学校文化—日系ブラジル人生徒の教育エスノグラフィ—』

ー』勁草書房。

清水睦美 2006『ニューカマーの子どもたち—学校と家族の間の日常世界—』勁草書房。

福岡安則 1993『在日韓国・朝鮮人—若い世代のアイデンティティ—』中公新書。

金泰泳 1999『アイデンティティ・ポリティクスを超えて—在日朝鮮人のエスニシティ—』世界思想社。

Zhou, Min, and Carl L. Bankston. 1998. *Growing Up American: How Vietnamese Children Adapt to Life in the United States*. Russell Sage Foundation.

Portes, Alejandro, and Ruben G. Rumbaut. 2001. *Legacies: The Story of the immigrant Generation*. Univ. of California Press.

2. 研究の目的

(1) 研究機関内に明らかにする内容

上記の学術的・社会的背景と問題意識に基づいて、本研究の目的として設定したのは次の点の解明である。

①ニューカマー第二世代の義務教育機関の教育経験が、青年期の日常生活に与える影響について、かれらの蓄える資源編成に注目しつつ明らかにする。

②ニューカマー第二世代の親世代が有していた「家族の物語」がどのように継承され転換したのか検討する。

③ニューカマー第二世代の家族編成の実態を明らかにし、エスニシティ間比較を試みる。

(2) 本研究の特色

本研究の特色は10年前の調査対象者への追跡調査である点である。対象地区の神奈川県大和市については、清水(2006)での対象者の追跡であり、愛知県名古屋市については、児島(2006)での対象者の追跡である。これまでのニューカマー研究は、共時的に生起する事象を比較検討することで、エスニシティ間の比較を行ってきている。しかし、本研究では通時性の観点を導入することで、ニューカマーの義務教育の経験が、青年期の日常生活に与える影響を検討できると考える。特に、義務教育期間の出来事について、語られる物語として理解するだけでなく、過去と現在の語られ方の違いに注目することで、そこに動員される資源の変化を明らかにすることができることも極めて独創的であると考えられる。第二の特徴は、ニューカマー第二世代で多様なエスニシティを対象とする大規模調査研究は現段階では報告されておらず、学術的価値は極めて高いと考える。

3. 研究の方法

インドシナ(ベトナム及びカンボジア)、南米(ブラジル及びペルー)、フィリピン、中国にルーツを持ち、日本における義務教育経験を有し、現在日本に在住しているニュー

カマー第二世代に対して、半構造化インタビュー調査を実施する。一回のインタビューに要する時間は1時間半から2時間を目安とした。

調査対象者は、本グループが長期にわたってフィールドワークを行ってきた神奈川県大和市、愛知県名古屋市(10年前の対象者の追跡調査)に加え、新たに、首都圏として、神奈川県厚木市、東京都新宿区・練馬区・三鷹市を、地方として、鳥取県、宮城県石巻市等を新規対象地区として実施する。対象者のリクルートは10年前にインタビューを行った対象者本人への追跡調査の他、本研究グループのメンバーが関わる学習支援グループ等からの紹介、インタビューを受けた対象者からの紹介等による。その結果サンプル数は合計約170名に及んだ。

インタビュー調査は研究分担者ごとに担当するエスニック・グループを決定し分担して行われた。

また研究会を原則隔月で開催し調査の進捗状況について確認するとともに、調査結果の共有を図った。

4. 研究成果

本研究期間における研究成果は、研究機関前半においては各エスニック・グループの特徴を描き出すことに焦点を当てたものが多く、研究期間後半においては、インタビュー件数の蓄積が得られたことから、エスニシティ間比較を念頭に分析考察を試みたものとなっている。以下、各年度における研究成果の概略を示す。

(1) 平成26年度

平成26年度においては、特に本年度はカンボジア・ベトナム・南米(スペイン語圏)にルーツを持つ20代~30代を中心とする成人男性約20名を対象にインタビュー調査を実施し、そこから得られたデータを比較検討することで各グループの特徴について仮説的な説明を試みた。

①親子関係と結婚については、カンボジアグループは子供が成長した後も濃密な親子関係が見られる一方で、ベトナムグループと南米グループでは比較的独立した家族関係が見られた。こうした親子関係の違いは配偶者選択にも影響が及んでおり、カンボジア及びベトナムグループでは母国からの呼び寄せによる結婚が多く見られた。一方南米グループではこうした結婚は見受けられず、配偶者は主として本人の判断によって選択されていた。

②義務教育経験の良し悪しに関してみれば、カンボジアグループが比較的「良い」経験を持つのに対して、ベトナム及び南米グループでは「良/悪」が二分された。ベトナムグループでは学校経験が良かったものの方がその後転職傾向が少なく安定しているように見受けられた。学校経験が良いことは、

言語に不安を抱えつつも参入した社会がうまくいけてくれたことを意味し、それがその後である社会への障壁を軽減するよう影響しているという仮説を示した。

③ルーツの表出について、ベトナム・カンボジアグループでは全員が、南米グループにおいても帰化した者を除いては表出されていた。ただし表出の仕方には積極的／消極的の違いが見られた。こうした違いは彼らが育った地域や通った学校において外国人性がいかにつまえられるかに大きく影響されると思われる。

(2) 平成 27 年度

平成 27 年度にはフィリピン、ベトナム、ペルーにルーツを持つ 10 代後半から 30 代前半の女性 25 名に対してインタビュー調査を実施した。特に女性の場合、男性よりも家族役割などにおいて期待されるものが大きいと考えられることから、①親世代との関係、②親世代からの文化継承、③親世代の人的資本と編入様式が第二世代女性の文化継承と地位達成に与える影響、の 3 点について考察した。

①に関してフィリピン系は「母娘」関係がもっとも強く、母親に対する「敬意と思いやり」がみられ、娘は母親をロールモデルとしていた。ペルー系では「親の権威の維持」をベースとした母娘関係がみられ、家事役割もそれらに基づいて引き受けられていた。ベトナム系では第二世代の方が日本社会への適応が早く、役割逆転が観察された。②について文化継承が最も弱かったのは役割逆転がみられたベトナム系であった。ペルー系では親世代との意志疎通ができる程度の言語継承がみられたが、家族役割の引き受け方については親世代の婚姻関係のあり方が影響を与えていた。フィリピン系は最も強く文化継承がみられたがその継承あり方には継承拒否・選択的継承・包括的継承の 3 パターンを見出した。③についてフィリピン系では文化継承のパターンにより学業達成に違いがみられた。ペルー系では親世代の人的資本と第二世代本人の社会関係資本のあり方で学業達成が異なっていた。

上記調査に追加して特にフィリピン系ニューカマー第二世代を対象とした調査も実施し、フィリピン系ニューカマー第二世代のエスニックな自己呈示のあり方とその変容についてライフコースの視点から解明を試みた。

(3) 平成 28 年度

平成 28 年度は新たにインタビュー調査を実施しつつ、前年度までに実施したインタビュー調査によって得られたデータの蓄積も加味し、エスニシティ間比較を念頭に置きながら検討分析を行った。

まず、ニューカマー第二世代のトランスナショナル実践についてベトナム・中国・フィ

リピンの各エスニシティ間に見られる違いを比較することでエスニック集団間の社会移動の比較考察を行った。日本社会において特に上昇移動を果たすうえで重要と思われるのは、親の人的資本、家族の編入様式、選択的文化変容を可能とする地域資源の 3 つの要素であった。

また、日本における義務教育経験のあるニューカマー第二世代の進路形成のあり方とその規定因についてブラジル系ニューカマーに着目しつつ解明を試みた。ブラジル系ニューカマーは「欠落／喪失」の経験を有しておりそれらの経験にいかなる語り直しを付与するかによって将来の進路形成に影響を与えていると考えられる。

さらに、ニューカマー第二世代のエスニック・アイデンティティの有り様について、ベトナム、カンボジア、中国、ブラジル、ペルー、フィリピンの各エスニシティの比較を視野に入れつつ、①第一世代の日本への移動の様相、②第二世代のエスニック・アイデンティティの様相、③エスニック・アイデンティティの分岐要因の 3 点を中心に分析・考察を行った。

(4) 平成 29 年度

平成 29 年度には各研究分担者が分担するエスニシティについて、職業選択、ジェンダーと学業達成、進路選択と大学進学、帰国経験について分析を行った。共通して指摘できるのは第二世代が出身国や親世代、あるいはエスニックコミュニティとの文化的葛藤を経て自らの日本社会での位置取りを固ろうと努めている姿であり、かれらの日本社会での達成が決して簡単なものではないということである。それは日本人が日本社会で社会的達成を果たそうとするのと比べて全く異なる葛藤を意味するものであった。また、親の人的資本の多寡が第二世代の達成に一定の影響を与えている状況も浮かび上がった。

さらに、インドシナ、中国、ブラジル、ペルー、フィリピンの 5 つのエスニシティに関して、日本における学校経験という共通の枠組みを通して比較分析を試み、各エスニシティごとの特徴を明らかにすることを試みた。第二世代の学校経験はかれらのエスニシティと深く関連し、エスニシティの表出とそれらをめぐる周囲の反応によって多様な適応が見受けられた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 10 件)

- ① 清水陸美、チューブサラーン、ニューカマー第二世代の青年期一義務教育の経験と就職後の生活状況との関係に注目して一、日本女子大学紀要人間社会学部、査読有、25 巻、2015、35-49

- ② 角替弘規、南米にルーツを持つニューカマー第二世代の青年期、桐蔭論叢、査読無、32巻、2015、29-36
- ③ 角替弘規、南米にルーツを持つニューカマー第二世代の青年期(2)―ペルーにルーツを持つ女性を中心に―、桐蔭論叢、査読無、34巻、2016、45-55
- ④ 額賀美紗子、フィリピン系ニューカマー第二世代の親子関係と地位達成に関する一考察―エスニシティとジェンダーの交錯に注目して―、和光大学現代人間学部紀要、査読無、9巻、2016、85-103
- ⑤ 児島明、ブラジル系ニューカマー第二世代の職業志向―「欠落／喪失」の資源化に注目して、地域学論集(鳥取大学地域学部紀要)、査読無、13(2)、2016、39-60
- ⑥ 清水睦美、ベトナム系ニューカマーのトランスナショナルな実践、人間研究、査読無、第53号、2017、25-39
- ⑦ 三浦綾希子、坪田光平、額賀美紗子、フィリピン系ニューカマー第二世代のエスニック・アイデンティティライフコースの分岐と選択的エスニシティへの変容―、中京大学国際教養学部論叢、査読無、9巻第2号、2017、69-95
- ⑧ 額賀美紗子、三浦綾希子、フィリピン系ニューカマー第二世代の学業達成と分岐要因―エスニック・アイデンティティの形成過程に注目して、和光大学現代人間学部紀要、査読無、10号、2017、123-140
- ⑨ 児島明、ブラジル系ニューカマー第二世代の「帰国」経験、地域学論集(鳥取大学地域学部紀要)、査読有、14巻、2018、145-166
- ⑩ 坪田光平、中国帰国者三世の教育と社会移動に関する一考察―文化変容とエスニック・アイデンティティに注目して―、技能科学研究、査読有、34巻(1)、2018、1-10

[学会発表] (計 19 件)

- ① 清水睦美、角替弘規、チューブサラーン、ニューカマー第二世代の青年期―義務教育の経験と就職後の生活状況との関係に注目して―、日本教育社会学会第66回大会、2014年9月13日～2014年9月14日、愛媛大学
- ② 清水睦美、角替弘規、額賀美紗子、ニューカマー第二世代の青年期―ジェンダーをめぐるエスニシティ間比較、日本教育社会学会第67回大会、2015年9月9日

～2015年9月10日、駒澤大学

- ③ 三浦綾希子、坪田光平、額賀美紗子、フィリピン系第二世代のエスニティ―ライフコースの中での変容―、日本教育社会学会第67回大会、2015年9月9日～2015年9月10日、駒澤大学
- ④ 清水睦美、坪田光平、三浦綾希子、ニューカマー第二世代のトランスナショナルな実践―ベトナム、中国、フィリピンの比較から―、日本教育社会学会第68回大会、2016年9月17日～2016年9月18日、名古屋大学
- ⑤ 児島明、ブラジル系ニューカマー第二世代のエスニシティと職業選択、日本教育社会学会第68回大会、2016年9月17日～2016年9月18日、名古屋大学
- ⑥ 清水睦美、移民第二世代青年期のエスニシティ間比較(1)―調査研究の概要とインドシナ難民の事例、第89回日本社会学会大会、2016年10月8日～2016年10月9日、九州大学
- ⑦ 坪田光平、移民第二世代青年期のエスニシティ間比較(2)―中国帰国者三世の文化変容パターン、第89回日本社会学会大会、2016年10月8日～2016年10月9日、九州大学
- ⑧ 児島明、移民第二世代青年期のエスニシティ間比較(3)―ブラジル系ニューカマーの事例、第89回日本社会学会大会、2016年10月8日～2016年10月9日、九州大学
- ⑨ 角替弘規、移民第二世代青年期のエスニシティ間比較(4)―ペルー系ニューカマーの事例、第89回日本社会学会大会、2016年10月8日～2016年10月9日、九州大学
- ⑩ 額賀美紗子、三浦綾希子、移民第二世代青年期のエスニシティ間比較(5)―フィリピン系ニューカマーの事例、第89回日本社会学会大会、2016年10月8日～2016年10月9日、九州大学
- ⑪ 角替弘規、ペルー系ニューカマー第二世代の職業選択、日本教育社会学会第69回大会、2017年10月21日～2017年10月22日、一橋大学

- ⑫ 坪田光平、劉麗鳳、中国系ニューカマー二世世代におけるジェンダーと学業達成—出身階層の差異に注目して—、日本教育社会学会第 69 回大会、2017 年 10 月 21 日～2017 年 10 月 22 日、一橋大学
- ⑬ 額賀美紗子、三浦綾希子、フィリピン系ニューカマー二世世代の進路選択と大学での学び、日本教育社会学会第 69 回大会、2017 年 10 月 21 日～2017 年 10 月 22 日、一橋大学
- ⑭ 児島明、ブラジル系ニューカマー二世世代の「帰国」経験、日本教育社会学会第 69 回大会、2017 年 10 月 21 日～2017 年 10 月 22 日、一橋大学
- ⑮ 清水睦美、移民二世世代は学校経験をどう語るか(1)—インドシナ系ニューカマーの事例—、第 90 回日本社会学会、2017 年 11 月 4 日～2017 年 11 月 5 日、東京大学
- ⑯ 坪田光平、移民二世世代は学校経験をどう語るか(2)—中国系ニューカマーの事例—、第 90 回日本社会学会、2017 年 11 月 4 日～2017 年 11 月 5 日、東京大学
- ⑰ 児島明、移民二世世代は学校経験をどう語るか(3)—ブラジル系ニューカマーの事例—、第 90 回日本社会学会、2017 年 11 月 4 日～2017 年 11 月 5 日、東京大学
- ⑱ 角替弘規、移民二世世代は学校経験をどう語るか(4)—ペルー系ニューカマーの事例—、第 90 回日本社会学会、2017 年 11 月 4 日～2017 年 11 月 5 日、東京大学
- ⑲ 三浦綾希子、額賀美紗子、移民二世世代は学校経験をどう語るか(5)—フィリピン系ニューカマーの事例—、第 90 回日本社会学会、2017 年 11 月 4 日～2017 年 11 月 5 日、東京大学

[図書] (計 0 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

名称：
 発明者：
 権利者：
 種類：
 番号：
 出願年月日：
 国内外の別：

○取得状況 (計 0 件)

名称：
 発明者：
 権利者：
 種類：
 番号：
 取得年月日：
 国内外の別：

[その他]
 ホームページ等
 なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

角替 弘規 (TSUNOGAE Hiroki)
 静岡県立大学・食品栄養科学部・教授
 研究者番号：10298292

(2) 研究分担者

清水 睦美 (SHIMIZU Mutsumi)
 日本女子大学・人間社会学部・教授
 研究者番号：70349827

児島 明 (KOJIMA Akira)
 鳥取大学・地域学部・准教授
 研究者番号：90366956

額賀 美紗子 (NUKAGA Misako)
 東京大学・教育学研究科・准教授
 研究者番号：60586361

三浦 綾希子 (MIURA Akiko)
 中京大学・国際教養学部・准教授
 研究者番号：90720615

(3) 連携研究者

坪田 光平 (TSUBOTA Kouhei)
 職業能力開発総合大学校・能力開発応用系・特任助教
 研究者番号：30735931

(4) 研究協力者

チューブ サラーン (CHUOP Sararn)
 宮脇 英里 (MIYAWAKI Eiri)
 劉 麗鳳 (RYU Reihou)